

⑪ 秋の七草調査

秋の野に咲きたる花を指(および)折り かき数うれば七種(くさ)の花
萩の花尾花葛花などしこの花 おみなえしまた藤袴あさがおの花

(山上憶良)

これは、日本の代表的な古典である万葉集の巻8に出てくる、秋の七草の歌です。下の歌は577, 577の繰り返しで、旋頭歌という形式です。尾花はススキ、あさがおは諸説がありますが、一般にはキキョウと考えられています。

一昔前まで、丘陵地の谷戸田のまわりには必ず小規模な草地がありました。農家の人たちは毎年草を刈って、家畜の餌や堆肥にしました。そのような草地を里草地と言います。そこには秋になると、たくさんの花が咲きました。日本の人たちは、農作業の合間に、そのような身近な場所に咲く花々を愛でてきたのだと思います。しかし、牛馬が化石燃料を使うトラクターに代わり化学肥料が普及するにつれて、草刈りは不要なものになりました。刈られなくなった草地には低木が茂り、野の花も今ではすっかり少なくなりました。

このような場所に咲く野の花の代表格が、「秋の七草」です。他にもワレモコウ、ツリガネニンジンなど、どうして「秋の七草」に入らなかったのか不思議なほどの植物がいくつかあります。このような植物の現状を調査することで、現在の愛知県で里草地環境がどの程度残存しているか把握したいと思います。平野部では、これらの植物は多くの場合河川の堤防に生育しています。

里草地に生育する植物の中には、現在では絶滅が危惧されるようになってしまったものもたくさんあります。できればそのような RDB 掲載種も調査対象としたいのですが、見かける機会があまり多くないと思われるので、今回は「秋の七草」に含まれるキキョウ以外は対象から除外します。「秋の七草」の筆頭であるハギは、実際にはいくつかの種類が含まれています。ハギ類の中で最も草地性なのはヤマハギで、秋の七草の「萩」は正確にはヤマハギを指すという意見も多いのですが、ヤマハギは愛知県ではあまり多くない上に中国大陸原産の移入系統が多く、識別が困難なので除外し、調査の対象はマルバハギとツクシハギに限定します。あるいは識別が難しいかもしれませんが、花部の写真を送ってもらえれば、それだけで判定することができます。フジバカマが何を指すかもよくわからないところがありますが、今日「フジバカマ」と呼ばれている植物は低湿地性で、愛知県では木曽川河川敷と五条川の一部に生育しているだけです。クズは郊外ではどちらかといえば嫌われ者、カワラナデシコはどちらかといえば夏の花ですが、これらもあわせて調査することにします。

【形態】

大型の多年生草本。根茎は短く、茎は束生して株になり、高さ1～2mになる。葉は茎の下部に多くつき、線形で長さ50～80cm、幅0.7～2cm、辺縁は手が切れるほど著しくざらつく。花期は8～10月、花序は長さ20～30cmで、数本～多数の枝がある。小穂は長さ5～8mm、長い芒があり、基部の毛は小穂と同じかそれよりやや長い。

【分布と生態】

日本全土で見られ、南千島、朝鮮半島、中国大陸にも分布する。

【よく似た種】

オギは低湿地性の種類で、根茎が横にはうため面的な群落を作り、少穂に芒はなく、毛は白くて長い。

【撮影のポイント】

植物体全体の様子がわかるよう、花だけでなく、葉の部分も含めて写す。



花穂の軸は短い

(清須市, 2003-10-3, 芹沢俊介)

ススキ 単子葉類 イネ科

Miscanthus sinensis Anderss.

くさち だいひょうせんしゆ あんたい 草地の代表選手だって安泰ではない

日本の草地の植物を何か一つあげろと言われたら、それはススキでしょう。昔の人にとっても、ススキは牛や馬の飼料として、あるいは屋根葺きの材料として、とても重要でした。そのため、わざわざ火入れをして木が育つのを防ぎ、ススキ草地を維持してきました。けれどもこのような場所は、最近では少なくなりました。少しならまだどこにでもあると思ったら大間違い、平野部の小河川の堤防などでは帰化植物のセイバンモロコシに押されて、全く見つからないこともあります。近縁種との交雑もあるようで、詳細な研究が必要です。



花穂は葉より短い

マルバハギ 真正双子葉類 マメ科

Lespedeza cyrtobotrya Miq.

(名古屋市, 2017-9-9, 加藤範夫)

くさち りんえん は かすい みじか
草地や林縁に生える花穂の短いハギ

【形態】

半低木。高さ 1.5m くらいになり、よく枝を分ける。葉は互生し、長さ 1~3.5cm の柄があり、葉身は 3 出、頂小葉は楕円形~やや倒卵形で長さ 2~4cm、幅 1~2cm、先端は円形~やや凹形で、小突起がある。花は 8~10 月に茎頂部の葉腋につき、全体紅紫色、花序はその基部の葉と同長程度か、それより短い。がく裂片の先端は針状に伸びる。マルバハギという名だが、他の種類に比べて小葉が特に丸いわけではない。

【分布と生態】

本州~九州、朝鮮半島、中国大陸に分布し、愛知県では平野部を除く全域に生育している。ヤマハギほど草地性でなく、里草地のほか、里山二次林の林縁などにも生育している。林縁に生育している場合は、「里山の植物」の指標種にもなる。

【撮影のポイント】

花序が短いことがわかるように写す。

ハギの仲間は、全体の説明でも述べたように多くの種類がありますが、本種はその中では比較の見分けやすい種類です。移入系統らしいものもなく、現在のところは、本種は全部在来系統だと思ってよさそうです。花穂は通常葉より短く、葉のもとに花がかたまってつくように見えます。そのため鑑賞価値がやや低く、栽培されることはほとんどありません。

ハギ類は多くが草本とも低木ともつかない性質を持っていて、地上茎は残っても短命です。語源は「生え芽」で、茎が毎年地表から勢いよく伸びるからだと言われています。

旗弁は基部を
除き淡色



ツクシハギ 真正双子葉類 マメ科
Lespedeza homoloba Nakai

(名古屋市, 2002-10-4, 芹沢俊介)

りんえん は もよう
林縁に生えるまだら模様のハギ

【形態】

半低木。高さ 1.5m くらいになり、よく枝を分ける。葉は互生し、長さ 1~5cm の柄があり、葉身はやや厚く 3 出、頂小葉は楕円形~広楕円形で長さ 2.5~5cm、幅 1.5~3cm、先端は通常凹形になる。花期は通常 9~10 月、花序は茎頂部の葉腋につき、長いものは長さ 8cm くらいになり、長さ 2~5cm の柄がある。花は他の種と異なり、2 色性が著しい。がく片の先端はマルバハギほど尖らない。

【分布と生態】

日本固有種で、本州~九州に分布する。愛知県では丘陵地には普通に見られるが、山地では少ない。平野部にも生育していない。

【撮影のポイント】

上の写真のように、花序部分を中心に写す。あまり遠くからだと、まだら模様がわからなくなる。

本種も、ハギの間では比較的見分けやすい種類です。花穂は長く、比較的広い角度で開出し、旗弁基部と翼弁が濃色、他が淡色で、その点でどの花弁も赤紫色の他の種類から見分けることができます。葉も他の種類より厚く、先端は通常ややへこみみず。本種も栽培されることは少なく、野山のものは全部が在来系統と思われます。愛知県の丘陵地では最も普通に見られるハギですが、どちらかといえば林縁性で、草地にはあまり生育していません。「里山の植物」の指標種とする方がよいのかもしれませんが、マルバハギとセットで、こちらで取り上げておきます。

調査
テ
ー
マ

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

調査
し
や
す
い
月

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2



葉は大きな
3小葉からなる

(大治町, 1996-10-1, 芹沢俊介)

クズ 真正双子葉類 マメ科

Pueraria lobata (Willd.) Ohwi

こうかい しげ しょくぶつ
豪快に茂るつる植物

【形態】

地下には太い根があり、茎は長さ10mに達する。葉は長さ10~20cmの柄があり、葉身は3小葉に分かれ、小葉はいずれも長さ10~18cm、先端は尖り、裏面は白色を帯びる。夏期は8~9月、葉の基部から出た柄の先に、紅紫色の花を多数つける。果実は扁平で長さ6~8cm、さやには褐色の毛が多い。根には多量のでんぷんを蓄え、そのため飢饉の時には救荒植物としても利用された。このでんぷんで作るのが、本物のくず餅である。花が淡色のものをトキイロクズ、白色のものをシロバナクズという。

【分布と生態】

北海道~九州、アジア南東部に広く分布し、愛知県でも平野部から山地まで、ほぼ全域に生育している。

【撮影のポイント】

花と葉をセットで写すとよいが、葉だけでも種名の確認はできる。

多年生の大型のつる植物。花はよく見れば水墨画のような風情があるのですが、とにかく豪快につるを伸ばして草地を覆ってしまいますから、どちらかといえば嫌われ者です。北アメリカでは日本から入ったものが猛烈に繁茂して、とても困っているようです。

しかしそんなクズも、繰り返し草刈りが行われる昔の草地ではそれほど茂ることができませんでした。しばしば土地が掘り返される街の中でも生きていくことはできません。クズの天下となるのは、適度に放置されている草地です。

【 形 態 】

茎は基部で分枝して直立し、高さ 50～80cm になる。葉は対生し、線形～披針形、長さ 3-9cm、粉白色を帯び、基部は茎を抱く。花期は 7～9 月、花は枝先に数個がまばらにつき、苞は 3～4 対、がくは円筒形で、長さ 3～4cm である。花弁は淡紅色、舷部は深裂し、下部に深紅紫色のひげ状の毛がある。種子は円形で扁平、黒色、直径約 2mm である。

【 分布と生態 】

日本～中国大陸に分布し、国内では本州、四国、九州に生育している。愛知県では山地から平野部まで広く分布しているが、それほど多いものではない。稀に園芸系統と思われるものが逸出していることがあるので、注意を要する。

【 撮影のポイント 】

花だけを拡大せず、ある程度全体がわかるように写す。

【 参考資料 】

県 GDB①p.279



花弁の先は
細裂する

(西尾市, 1993-8-5, 芹沢俊介)

カワラナデシコ

真正双子葉類 ナデシコ科

Dianthus superbus L. var. *longicalycinus* (Maxim.) F.N.Williams

かわら 原ではなく くさち には
河原ではなく草地に生えます

日当たりのよい草地に生育する多年生草本。ナデシコの類には多くの種類があり、園芸植物として栽培されているものも多いのですが、本種は野の花です。里草地の代表的な植物で、夏～初秋に淡紅色の花を咲かせますが、どの場所でも個体数はそれほど多いものではありません。しかも、近年の草地の減少に伴い、見る機会は次第に減少しています。カワラナデシコという名前がついていますが、河原の礫地に生育することはありません。秋の七草の一つですが実際には夏の花で、秋の中頃には見られなくなってしまいます。



小さい花が
集まって咲く

(設楽町, 2003-8-23, 芹沢俊介)

オミナエシ 真正双子葉類 スイカズラ科 *Patrinia scabiosifolia* Fisch.

やさ すがた の はな
優しい姿の野の花

日当たりのよい草地に生育する多年生草本。秋に黄色の花を咲かせます。全国的には減少傾向の著しい植物で、時折レッドデータブックに掲載するかどうか話題になるほどですが、愛知県ではまだかなり多く見られます。里草地の代表的な植物でもあり、ある程度まとまって生育している場所では継続的なモニタリングを行いたいものです。ただし時に栽培されることがあるので、逸出でないか確認が必要です。女郎花と書きます。優しい姿の植物ですが、やや悪臭があります。

【形態】

茎は高さ 70~120cm になる。葉は対生し、下部のものには柄があり、葉身は羽状に深~全裂し、頂羽片が最も大きく、長楕円状ひし形~線状楕円形、長さ 2~6cm、鋭頭~鋭尖頭、側羽片は 1~3 対である。花期は 8~10 月、花は多数つき、黄色、花冠は 5 裂し、直径 3~4mm、雄ずいは 4 本である。

【分布と生態】

北海道~九州、シベリア北部~中国大陸に分布し、愛知県では山地や丘陵地に点在する。

【よく似た種】

オトコエシは植物体に毛が多く、花は白色である。林縁性の植物で、山地ではオミナエシより多い。

【撮影のポイント】

花部だけを拡大せず、ある程度植物全体の様子がわかるように写す。

【参考資料】

県 GDB①p.309

【形態】

茎は高さ 1~2m になる。葉は対生、短い柄があり、葉身は楕円形~卵状長楕円形、長さ 10~18cm、幅 3.5~7cm、辺縁には通常大きくてやや粗い鋸歯がある。花期は 8~10 月、頭花はほとんど白色で、茎や枝の先端に、この仲間としてはややまばらに散房状につく。

【分布と生態】

北海道~九州、朝鮮半島、中国大陸に分布する。愛知県では山地~丘陵地に普通に見られるが、平野部では稀である。

【よく似た種】

ヨツバヒヨドリは山地生で、葉が 3~4 輪生する。サワヒヨドリは葉が小さく、無柄で 3 脈が目立ち、山地では草地に生えることもあるが、丘陵地ではほぼ湿地に生える。いずれも写真があれば識別可能である。

【撮影のポイント】

花部だけを拡大せず、葉も含めて写す。



小さい頭花が
集まって咲く

(豊橋市, 2000-10-8, 芹沢俊介)

ヒヨドリバナ

真正双子葉類 キク科
Eupatorium chinense L.

なごろさはな ヒヨドリが鳴く頃咲く花

林縁などの草地に生育する多年生草本。2 倍体系統 (コヒヨドリバナ) と倍数体系統がありますが、今回の調査対象は後者です。倍数体系統は、コヒヨドリバナと区別してオオヒヨドリバナと呼ぶこともあります。コヒヨドリバナは小型で個体数も少なく、一般の人の目に触れる機会はほとんどないと思われますから、調査の際にはあまり気にしなくてもよいでしょう。名前は、ヒヨドリが鳴く頃咲く花という意味。しかし最近では、ヒヨドリは一年中鳴いています。



茎の下部の葉は
対生～三輪生

(新城市, 2004-8-8, 加藤範夫)

【形態】

多年生草本。茎は直立し、高さ 50～100cm になる。葉は茎の下部では対生または 3 輪生、上部では少しずれて互生し、葉身は狭卵形、長さ 4～7cm、幅 1.5～4cm、辺縁に小さい鋭鋸齒があり、裏面は短毛があつて粉白色を帯びる。花期は 7～8 月、茎の先端部に 1～数個の花をつけ、花冠は青紫色で広鐘形、先は 4～5 裂し、直径 4～5cm である。雄ずいは 5 個で、雌ずいより先に熟す。

【分布と生態】

北海道～九州、ウスリー、朝鮮半島、中国大陸。愛知県では、山地～丘陵地に広く分布している。しかし平野部に近い場所では、河川の堤防、水路わきの草地などの草刈りが継続的に行われている場所に僅かに生育しているだけである。

【参考資料】

県 RDB 植 p.542

キキョウ 真正双子葉類 キキョウ科

Platycodon grandiflorus (Jacq.) A.DC.

さいきん へ あき はな 最近すっかり減ってしまった秋の花

明るい草地に生える多年生草本。花は大きく紫色で、そのためしばしば栽培もされています。万葉集のアサガオが現在の何に当たるかについては諸説があり、現在のアサガオそのものだ、いや、ヒルガオだなどという意見もあります。現在のところはキキョウ説が有力なようです。説の当否はともかく、キキョウが里草地を飾る代表的な花の一つだということについては、誰も異論はないでしょう。しかし、全国的に減少傾向の著しい植物で、国でも愛知県でも絶滅危惧Ⅱ類、他の多くの都府県でも絶滅危惧種とされています。

【 形 態 】

茎は高さ 40～80cm になり、切ると白い乳液が出る。根出葉は円形で長い柄があるが、花時にはなくなる。茎葉は卵状楕円形～披針形、長さ 4～8cm、3～4 枚が輪状につく。花期は 8～10 月、茎の上部の枝の先に、1～数個ずつ花をつける。花は淡紫色、長さ 15～20cm の釣り鐘状、先は 5 裂し、裂片は三角形でやや反り返る。花柱は花冠から少し突き出す。

【 分布と生態 】

南千島、サハリン、北海道～九州に分布し、愛知県でも土手などの日当たりのよい草地に多く見られる。基準変種のサイヨウシヤジンは、西日本～中国大陸に分布する。

【 よく似た種 】

普通に見られる植物の中では、似た種類はない。山地に稀に生育するソバナ(県の準絶滅危惧種)は、葉が互生する。



花柱は花冠の外に出る

(名古屋市, 2001-9-9, 芹沢俊介)

ツリガネニンジン

真正双子葉類 キキョウ科
Adenophora triphylla (Thunb.) DC. var. *japonica* (Regel) H.Hara

とて なら うすむらさきいろ つ がね
土手に並ぶ薄紫色の釣り鐘

多年生草本。秋の七草には入っていませんが、本種も代表的な秋の草花を飾る花です。平野部でもところどころに生育しています。うす紫の釣り鐘状の花はとても特徴的です。若芽は山菜の一つで、トトキと呼ばれます。

秋の紫色の花としては、ノギクの類も目立ちます。しかし、ノコンギクはやや攪乱の多い場所にも生育しており、ヨメナはやや湿地性の植物で水田の畔などに多いことから、今回の調査対象としては取り上げませんでした。



花糸は短く花序の外に出ない

(常滑市, 2000-10-8, 芹沢俊介)

ワレモコウ 真正双子葉類 バラ科

Sanguisorba officinalis L.

あか はな
ボクだって赤い花だよ!

日当たりのよい草地に生育する多年生草本。秋に紅紫色の楕円形の花穂をつけます。ツリガネニンジンやオミナエシと共に代表的な里草地の植物で、どうして秋の七草に入れてもらえなかったのか不思議なほどです。現在のところはまだ普通に見られる植物で、平野部でもどこにでもあるというわけではありませんが、そのつもりで探せば河川の堤防や用水路の土手などに点々と生育しています。語源は「我も紅」という説が一般的ですが、花がよく見ると家紋の一つに似ているからだという説もあります。

【形態】

茎は上方で分枝し、高さ 50～100cmになる。葉は羽状複葉、根出葉は長い柄があり、小葉は5～11個で楕円形、長さ 2.5～5cm、辺縁には三角形の鋸歯がある。花期は 8～10月、花序は枝の先に1個ずつつき、楕円形で直立し、長さ 1～2cm、花は暗紅色で小さく、密集してつく。

【分布と生態】

北半球の温帯域に広く分布し、日本では北海道～九州に生育している。

【よく似た種】

ミヤマワレモコウ(県の絶滅危惧ⅠB類)はやや湿った草地に生育し、花穂が長く、花糸が長く花の外に伸びる。希少種であるが人里近くに生育していることがある。花部の写真があれば識別可能である。

【撮影のポイント】

識別が目的なら、花部を拡大して写すとよい

【参考資料】 県 GDB①p.261

在来種緑化

近年、生物多様性に対する最大の脅威となっているものの一つが、工事跡の法面などを緑化する際に用いられる「在来種緑化」と呼ばれる工法です。ヤマハギについては全体の説明で書いたとおりですが、ヨモギなども中国大陸原産の系統が多数導入されていて、もうわけがわからないという状況です。

緑化に際し外来種は避け、在来種を使おう。この考え自体は正しいものです。ところが生物の種は、一つの「種」にまとめられていてもそれぞれかなりの分布域を持っており、その分布域の中で場所に依じて、さまざまな遺伝的分化が生じています。すなわち、分類学的には一つの種でも、ある場所の集団は他の場所の集団とは遺伝的に異なるのです。このことを無視して、「同じ種ならよいだろう」と他地域の系統を導入すると、同じ種ですからその地域にもともとあった系統と交雑して、稔性のある子孫を作ります。その子孫は更に戻し交雑を繰り返し、その結果その種が長い時間をかけて作り上げてきたそれぞれの生育環境に対応した地理的な遺伝子レベルの分化は破壊されて、わけのわからない混合集団が形成されてしまいます。

生物多様性は、種の多様性だけではありません。遺伝的な多様性も、無視してはいけません。在来種緑化を行うならば、その種子は、種子が自然散布される範囲で採取しなければなりません。ところがそれは膨大な手間がかかります。それはとてもできない、同じ「種」ならどこでもよいだらうと中国などから輸入した種子を使うと、深刻な遺伝的攪乱が起きるのです。

しかも、名前の上では「同じ種」といっても、緑化材を扱う組織ではそこまで厳密な区別はしていないようで、実際にはさまざまな近縁種が混同されています。「ヤマハギ」と言えばハギの仲間、「ヨモギ」と言えばヨモギの仲間くらいに思う方が無難です。在来種緑化を行うと、多くの場合は近縁の種もたくさん入ってきます。その中には本来の生育地ではある程度生態的に隔離されていても遺伝的隔離が十分発達していないものもありますから、人為的に播種された場所では相互に交雑して、ますますわけがわからなくなることがあります。

在来種緑化を行うならば、確実に同じ種の、自然散布される範囲内で採取した種子を使用する。それが困難ならば、日本に近縁種がなく、外見からだけでも確実に外来種とわかるものを使用する方がまだましで、「同種」と称する他地域由来の種子を使うのは最悪である。このことを忘れないでほしいと思います。